

美術の窓(4)

朝鮮美術展の感想

大和文華館館長 吉川 逸 治

今夏の朝鮮美術展は、陶磁と絵画を主とし、それに若干の書蹟、漆芸、金工、仏頭を加え、百点に満たない展示品でしたが、日本にある代表的な作品を揃え、原史時代から李朝時代末まで、種類変化に富み、実によく朝鮮半島の美術の長久な流れを示したものと感じました。開期中、韓国からも数多くの美術史家や愛好者が来訪され、熱心に鑑賞し、催しを高く評価されてゆかれました。

私としては、韓国美術は全くの素人ですが、今回の展示の企画、実現にあたった本館の学芸部次長吉田宏志君の案内で、今春、ソウル近郊、竜仁にある湖巖美術館の開館式に招待された機会に、韓国を訪れて、始めて現地でその美術品に接触した次第です。その第一印象は、朝鮮美術には形に対する独特の強い感覚があることで、次はこの造形力を背後から支え、かつ形の表現を特徴づける現実についての卒直な感覚だと思いました。これが、今度の展観で一層はつきり感ぜられます。

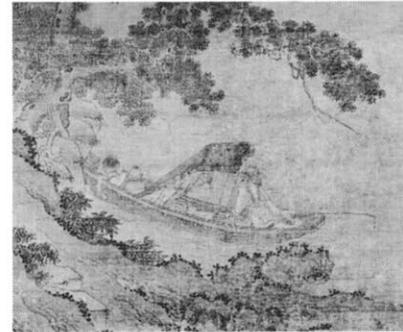
形は陶磁器でよく解ります。原初から中世の高麗、李朝の近世まで朝鮮陶磁は、柔かい円い簡素な造形で、素材の現実をはつきりと表示し、質実で、彩色模様もあるが、その場合でも色彩は地味に抑えて、むしろ単色調に近い。本来は、白色、灰色、黒、また青緑色といったモノクロームが特徴的で単色調は円筒や球体という単純な器体の形をまとまりよく強く定着させます。この地味なモノクロームの造形には、慎しい精神性が凝

集されて存在します。内省的な、思想的なといった性格の。そして、同時に素材に対する単純卒直な信頼感が窺われます。高麗青磁の貴族的な制作では、この本性が薄められるどころか、逆に高揚されて、慎み深い気品となって、装いを一段と洗練させます。白土や黒土の、時には辰砂の象嵌によって、動植物図様のこの上もないデリケートな模様が施されますが、それらは慎重で地味で、器体の造形を乱さず、静かに自然や人生のエピソードを奏でています。金属象嵌に倣って誕生した技巧との説明をききましたが、この起源が技巧と装飾の厳しさと繊細さを物語るようです。

このような高麗陶磁と金工品で魅了する洗練された気品と繊細明確な表現は高麗仏画のうちにも、写経のうちにも見出されます。どれも、貴族的文化の性格で貫かれますが、わが藤原仏画と比べると、装飾化とか図様形式化の抽象性が甚しくなく、人物、衣裳の実感から遊離しない。緻密に、時に細かく筆を運びながら、顔や身体丸味付けも、皮膚の感じも生かし、衣も身体を柔かく包む。そのため色彩は形に従属しながら、髪線のアラバスクを描きます。当館所蔵の「楊柳観音」や「阿弥陀如来」の画像などは、恐らく朝鮮絵画の代表的作品と推察しますが、仏教絵画全体の作品のなかでも優品と思います。これら作品の鮮やかな印象は、仏画師でありながら人間現実との結帯を執拗に、慎重に如来像などの表現に求めた結果ではない



青磁羅漢 高麗時代



舟遊図(部分) 伝李上佐筆 李朝前期

でしょうか。

この対象との結帯は水墨画になると空間との関係となって表現されることとなります。この度の展観に際して、ソウルの弘益大学の安輝濬教授が来られて、李朝絵画に就いて、蘊蓄を傾けて二時間余に渉る講演をして下さいました。その冒頭に、十五世紀の大画家、安堅の「夢遊桃源図」(天理図書館所蔵)を詳しく説明されましたが、幸い、当館にも安堅と伝えられる「煙寺暮鐘図」の優品があり、この大画家の堅実に構成された理想的風景画の芸術をよく味わうことができます。此度の展観には韓国水墨画について数多くの優品を泗川子コレクションから拝借しました。そのなかから、幾点か特に選んで見ますと、「月下訪友、舟遊図」の双幅は、韓国の美術史家達も名画家李上佐と認めてよいとの大幅で、人物の居る近景から大空遠山に至るまで、しっかりと筆で適確に画面を満たし、かつ渺茫たる空間をも作っている堂々たる大作です。筆者不祥の「瀟湘八景図」の八幅が揃って列ぶと壮観です。わが周文は、韓国風景画の影響を受けたと言われてきましたが、周文様の山水画に見る渺茫とした空間に影のような遠山が浮ぶというのではなく、画面を満たすものは、遠山でも雲でも明確で形があり重味すら感じられます。韓国的リアリズム

と言うのでしょうか。この点が一番強調されているのが、「深山尼僧帰路図」であります。深山といっても、遠景も中景も山嶽溪谷を墨をたっぷり含ませた筆で重々しく描き満ちし、石橋を渡る尼僧の歩みもしっかりしている。運筆の遅さ、鈍さが却って形に重味を与えている。みな北宗画法を学んで、山水、人物も画法に倣って描くのですが、このような素朴な実体感で満たすところは独特でありましょう。申潜の「龍虎図」は、民画に近い感じですが、それは余り画法に則らず、実際の印象に従って虎も松も描いたからです。また、他方、所謂民画の作品でも、大津絵の如く図様化されず、激しい筆致で実感を吐露するといった作品によく出会います。このような素朴で実厚なリアリズムは、展示された仏頭の類、ことに小さな高麗青磁の羅漢の顔に鋭く刻みつけられています。韓国的リアリズムと言うべき、注目すべき一特性ではないでしょうか。三年ほど前バリの秋のサロンで、世界中の国々の現代画で満された広大な会場の一角に韓国の現代美術家たちの作品が陳び、注意を惹きましたが、私はここでも具象から抽象までの作品群のなかで、二、三の老画家の大作にこの民族的な誠実なリアリズムを認めました。

季刊 美のたより No.60

昭和57年 8月12日

発行 大和文華館